

# 草野心平と中国

——嶺南大学時代——

Kusano Shinpei and China

——Especially While He Was Studying At Linnan University

池上貞子

## 要 旨

日本诗人草野心平(1903—1988)曾经两次在中国长期生活。第一次是从1921年夏天到1925年6月,在广州岭南大学留学;第二次是中日战争期间,在南京的汪精卫政府内任职。这两次经历不但都反映在他的文学作品之内,而且对他的一生也产生了很大的影响。

他本人也曾说过他的诗人生活开始于岭南时代。在本篇论文里,笔者拟考察分析草野心平在岭南大学时候的生活和感情的经历,以助于更加透彻地理解他的整体作品世界以及人生的轨迹。

## I、はじめに

### 無題

そこらここらに墓のある  
だんだらの広い草丘の上を  
灰黒色の水牛の群が  
あたまを垂れて草を食っている  
前の水のないおもてには  
小さい稲の切株がかぼすく並んで  
それから出た青い芽が  
刃の様な晩秋の空気に触れている  
さっき、めちゃくちゃに光っていた太陽が  
段々おとなしくなって赤らんできた  
みんなが沈黙している  
太陽の行動にきき入っている

これは詩誌『詩聖』（1923年3月）に掲載された草野心平（1903～88）の詩だが、後に日本の近代文学史に名を残すことになったこの詩人にとってはじめて公にされた詩である。原稿がはるばる「南支那広州嶺南大学」から送られてきていたため、選者は草野を「多分中華民国の人であろう」と判断し、「詩としては傑作ではないとしてもいやに上手がっていない素直さを採る」<sup>(1)</sup>と評した。草野は85年の生涯のうち、1921年から25年の青春時代の貴重な4年あまりを広州、とくに嶺南大学で過ごした。青春の最盛期を嶺南で送ったことは、詩人としても個人としても、草野の生涯に決定的な影響を及ぼした。本人も事あるごとに懐かしみ、エッセイ「わが青春の記」のなかの「中国生活」や譚覚真によるインタビュー「排日運動の中で〈中国・嶺南大学時代〉」をはじめ、おびただしい量のそのことに言及した文章を残している。

本稿では「蛙と富士と幻の詩人／天のアナルシスト」「昭和の詩史の水脈の中で、偉大な光芒を放った最後の昭和詩人」<sup>(2)</sup>とされた草野心平にとって、中国体験のもつ意味、今回はなかでも嶺南大学がどんな意味をもっていたのか、考えてみたい。

## Ⅱ、嶺南大学について

草野心平の履歴紹介などをみると、よく「中国広州の嶺南大学（現・中山大学）に学ぶ」としてあるものが多い。草野自身も戦後訪中して広州を訪れた際、母校として現在の中山大学を訪れ、かつての同窓生等とも再会している。そして現在の中山大学には、たしかに「嶺南学院」（「学院」は一般に単科大学の意味だが、総合大学の学部にあたる場合も多い）が含まれ、キャンパスもかつて草野が青春の日々を過ごした康楽にある。しかし、その概要を見ると、経済・金融・財政税務・国際ビジネス・経済管理の五学部で、英米文学など草野が学んでいた人文学部は見あたらない。

実は、この1888年アメリカ人によって創設されたミッション系の嶺南大学は、社会主義国家中華人民共和国が成立した三年後の1952年に、全国的に行なわれた調整のなかで、嶺南大学としては中止になり、学部学科ごとに中山大学やその他の高等教育機関に合併された。そして1986年にかつての栄光ある歴史を惜しむ関係者の中から声があがり、1987年12月より中山大学嶺南学院が中国国家教育委員会によって正式に批准され、1989年にもとのキャンパスで正式に開学したのである。

一方、香港でももうひとつの流れがあった。もともと1922年に司徒衛という教師が任されて、香港に嶺南の分校を開き、小学校教育から始めて後に中学・高校まで作った。1952年に広州の嶺南大学が中止になった後、関係者の多い香港ではその復活を望む声が高く、1967年、熱心な校友たちが「嶺南書院」を立ち上げ、司徒拔道中学跡で授業を開始した。1969年に「嶺南教育機構」を成立させ、書院を小・中一貫教育体制にした。その後、1978年に「嶺南学院」としたが、その

設備や内容はまだ不十分だったようだ。関係者の努力が実を結んで、1987年英国国家学歴領受委員会の、そして1991年に香港学術評議委員会の審査を通り、1992年には正式に学位授与のできる高等教育機関として認められた。発展につれて旧来のキャンパスでは手狭となり、新界のすこし奥まった屯門に広大なキャンパスを造り、1996年2月からそこの授業が始まった。1995年から修士課程も開設している。1999年7月、学院から大学になった。「嶺南大学」の復活を果たしたわけである。

ところで、こうしたふたつの流れの源流は、1888年にアメリカ人の Rev. Andrew P. Happer, M. D., D. D が広州に創設した「格知書院」に始まる。1912年に五嶺の南という意味をこめて「嶺南」と名づけられた。開設当時入学した30名の学生のうち4名はアメリカからの帰国者で、在外華僑の教育も大きな意味を持っていた。1921年に附属の華僑学校もでき、その1年間で87人の、10数カ国から来た華僑の子弟が在籍するようになったという。その後、1921年にはシンガポールに、1938年にはサイゴンに分校を開設した。広州の嶺南大学では、草野が去ったあとの1929年の時点で、全校952人の学生のうち220人が華僑の子弟だったというから、華僑との関わりの深さが知られる。大学の開学当初は、義和団事件（1900年）前後の排外的な空気の中で、教育方針にも変更があり、所在地も転々としたようだが、1904年、康楽というところに広大な敷地を買い、1912年には「嶺南学校」に、1927年には正式に中国教育部に「嶺南大学」として登録された。

上記の軌跡は、主として現在、香港にある嶺南大学の刊行物に依拠してまとめたものだが、社会の認知度との関連か、1905年嶺南大学創立という捉え方もあり、当時、他の大学ではまったく行なわれていなかった男女共学が、嶺南大学の場合は最初から実施されていたことが高く評価されている<sup>(3)</sup>。草野心平はこうした流れと雰囲気の中かで、1921年夏から25年6月まで学んだのだった。

### Ⅲ、嶺南大学での生活と学友たち

ここでは草野心平の伝記の中かで、とりわけ嶺南大学の頃を中心に彼の動向をみってみる。草野心平は家庭の事情により、東京で暮らす両親や他の兄弟たちとは別に、福島県の田舎町で村長をしていた祖父と祖母のもとで育てられた。蛇足ながら、彼が何かというと人や物を嘔む<sup>(4)</sup>疝の強い子どもだったのは、こういう生い立ちも関係しているかも知れない。

地元の小学校を卒業し、1916年4月に福島県立磐城中学に入学し、美術部に入って活躍する。1919年11月、4年生の時に退学し、両親（この頃は実母は亡くなって、継母がいた）のいる東京に出、翌年4月、私立の慶応大学普通部3年に編入した。この頃から日本脱出の気持ちを持ち、たまたま来日していたハワイの野球チームに同行してハワイへ行くことを希望するが、果たせず、

その後家出、慶応も中退する。その年の秋から昼は正則英語学校で英語を、夜は東京にあった中国系の施設善隣書院で北京語を習う生活を続ける。結局、父の仕事上の知り合いを頼って広州に行くことに決まる。

1921年1月、東京を発ち、上海経由で広州へ。父の友人の会社でアルバイトをしながら英語を学び、7、8月と嶺南大学の夏期講習を受講、9月に同大学の General arts Sub-freshman に入学した。大学で唯一の日本人学生だったと言う。翌年2月には、詔関へ北伐途中の孫文に会いに行っている。

9月には General arts Freshman に進級、同じクラスには革命家廖仲愷・何香凝夫妻の娘の廖夢醒がいた。大学の図書館で英詩を読み、とくにヨネ・ノグチやアメリカの新興詩に惹かれ、翻訳も試みた。ワイルド、ホイットマンなども読んだ。「エミイロウエルなどのイマジズムの作品群、E・E・カミングスの斬新なスタイル、それからサンバークやマスターズやリンゼイの、どちらかといえば左翼的作品にひかれていた。ことにサンバークの『シカゴ詩集』や『煙と鋼鉄』や、その後大分おくれて出た『おはようアメリカ』などから、相当数翻訳した程だった。」<sup>(5)</sup>

また、このころ、日本から左翼系、社会主義系の雑誌も取り寄せて、よく読んでいた。

学内では、Poetry meeting を組織（梁宗岱・劉遂元〔後、思慕〕・陳三兄弟・葉啓芳・司徒喬・心平ら十二、三人）、各国語の詩を朗読したり、「文学」というリーフレットを出したり、音楽を聴く会を持ったりする。当時、特に詩を書いていたのは、梁・劉・心平の3人だった。

1923年3月、本論の冒頭で紹介した詩「無題」が日本の詩誌『詩聖』に掲載された。その雑誌には当時山東にいた黄瀛<sup>(6)</sup>の詩「早春登校」も掲載され、これが縁でその後の長い交流が始まる。

夏休みに徴兵検査のため帰国。亡兄民平との合本詩集『廢園の喇叭』をガリ版刷りで出したりした。9月に広東へ戻るが、船上で当時の東京周辺に大被害をもたらした関東大震災（1923年9月1日発生。マグニチュード7.9）のことを知った。

大学に戻って、General arts Junior に進級。植物標本作成のアルバイトなどをする。詩作多数。この年の作品数は210数編に及ぶという。

1924年2月、3月、4月に立て続けに詩集『空と電柱』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを刊行。いずれも発行所を「中華民国広東嶺南大学草野方（Ⅰでは草野方は省略）空と電柱詩社」とする。6月には、香港に寄港していたプレゼント・ライン船上に、北京へ講演に行く途中のタゴールを訪ねている。夏休みに帰国し、詩の会を開いたり、詩人山村暮鳥（1884-1924）に会いに行ったりと、詩にかかわる活動を活発に行なった。

9月、General arts Senior に進級。同時に、新設された日本語講座の講師になった。この頃、広東の教会でキリスト教徒としての洗礼を受けたが、すぐに帰俗した。また日本人居留地のあった沙面で開かれていた「一葉会」という短歌の会にも参加していた。9月に詩集『BATTA』、12月に詩集『踏青』を刊行した。

1925年2月に恋愛詩集『919』（「きく」と読ませたらしい）を作成するが、革命で騒然とする広東の状況に適さないと考え、破棄したと言われる。

4月、同人詩誌『銅鑼』（中華民国広州嶺南大学 銅鑼社）を創刊。同人は黄瀛、原理充雄、劉遂元、富田彰、心平の5人。B5版、変型ガリ版刷。

6月23日、5・30事件から波及した広州沙面事件の影響で、嶺南大学でも外国人排斥運動が起こったため、7月7日、友人たちに守られながら広東を脱出した。そのとき持ち出した未製本の『銅鑼』3号は、当時、受験勉強のため青島から東京にきていた黄瀛のもとに寄宿して、製本、発行、配送を行なった。

その後も精力的に詩の創作を行ない、1927年には活字印刷された第1詩集『第百階級』を出版。1940年には、当時汪兆銘政権の宣伝部長をしていた嶺南大学時代の友人林柏生<sup>(7)</sup>の招聘で、家族とともに南京に渡り、再度の中国での長期生活が始まるのだが、詳しいことはまたべつの機会に譲る。日本敗戦のあと南京日僑集中營での生活を経て1946年3月に帰国した。

その後、1956年9月に訪中文化使節団副団長として再び中国の地を踏み、広州の嶺南大（現・中山大学）を訪れて、かつての学友梁宗岱、葉啓芳らと再会した。また1968年4月にはソ連・ヨーロッパ訪問の帰途、香港でやはり嶺南大学時代の同窓生らと会った。そのことについては許錫慶が「草野心平香港に寄る」を書いている<sup>(8)</sup>。

最後に、嶺南大学での学友たちのことについて触れておく。直接固有名詞を入れた詩には、a「広東を去る直前」、b「柏生を死ぬな」、c「わたしは信じ待つ」などがある。aは1925年7月の広東脱出の状況を歌ったもので、変装して租界から中国人街に紛れ込んだところ、林柏生に声をかけられて驚きつつ、共通の友人たちについて話題にする。北京に行っていた鍾世芬が帰ってきていること、デモで血だらけになったMiss 寥（夢醒）のこと、劉（遂元）に関しては猥談まで飛び出す。そして死骸を街頭にさらされた陳先生（？）の写真を、大学の掲示板で見るといふもの。bは林柏生が1939年3月、香港で暴漢に襲われたのを知り、死ぬなと呼びかけるもの。cは、かつて東京・銀座で語り合った劉遂元と葉啓芳が、蘆溝橋事変の報に接するやいなや抗日のために帰国。1943年現在南京にいた草野は、消息の分からないこれらの友人たちを偲び、いつかかならず「再び君等と相抱く日のあることを。私は信じ私は待つ」という内容のものだ。このほか、エッセイでも学友や教師に言及している。

草野は戦時中、戦争を賛美するような詩もかなり書いたし、中国との関わり方についても親日政権であった汪兆銘政権に協力した。こうした身の処し方についてはいろいろ論議もあるところだが、中国との関わりに関して言えば嶺南大学時代の友人関係<sup>(9)</sup>が大きな意味をもっているようだ。このことについては、次章でまた考えてみたい。

#### IV、草野心平と嶺南大学

中学時代には油絵を描き、むしろ美術の方に関心があった草野心平は、嶺南大学において、アメリカ詩の翻訳を試みたり、文学グループを運営してみたり、詩誌への投稿を行ったり、手刷りの詩集を出版したりなど、いわばその後の長い詩人としてのスタートを切ったことになる。そのためか、その後も中国やアジアに心が向かうとき、つねに大学時代が意識の根底にあったようだ。戦後出した詩集『亜細亜幻想』1953の題辞はこんな風に書かれている。

潼関からオールドスを迂回して甘肅へ。更に遡ってその源流を極める黄河探検隊が組織されたら。自分もその一員に加えてもらいたい夢を持っていた。一個の詩人としてその沿河の天然を歌いたいために。

二十代後期から四十代までの作品のなかから亜細亜に関するファンタスティックなものばかりをここに収録したが、これらの作品は、広東での学生時代の探検への夢の変型のようにも思われる。

嶺南大学時代が彼の詩作と人生にもつ意味についてはいろいろ論じられていて、たとえば詩人の長光太は、草野が日本の詩よりも先にアメリカの現代詩とくにカール・サンドバーグに出会い、惹かれたことに注目し、草野の詩に俗語が多いことに、サンドバーグの詩におけるスラングの影響を見る。またそのサンドバーグを中国民主革命の拠点広東で読んでいたことから、排日色に満ちた当時の日中関係において、草野が中国民衆の側に立ち、中国を故国と感じていた、ととらえる<sup>(10)</sup>。

また、吉田熙生は、草野の心身に嶺南大学での中国人学生との厚い友情が涵みこみ、それは中国を「第二の故郷」とする思い入れにまで発展して、そのことが草野が1940年、南京に赴いた理由であるとする。草野は総じて中国人の「大人の態度」に敬服しており、とくに二十一条要求に象徴される日本の半植民地化政策に対して排日運動を展開しながらも、1923年9月、日本が関東大震災に見舞われた時などは、嶺南大学学生自治会は「天災への救援と日本政府の政策への反対は別問題である」として、救援を決定したことなどに、それを感じていた。吉田は、「草野にとっては、(汪兆銘政権の標榜した)『全面和平』というのは、嶺南大学での友情の国家的規模における再現と展開であり、強者である米英という『蛇』に対する、弱者としての日本と中国という『蛙』の連帯なのである」<sup>(11)</sup>とする。

これらの論を踏まえつつ、筆者は、ここでは「日本語の再発見」と「中国との関わり方」に焦点を絞って述べてみたい。彼は詩集『凹凸』1974の「覚え書きⅡ」で、半世紀前に嶺南大学で毎月一回少数の仲間と開いていた the poetry meeting の活動内容について詳しく書いている。た

いてい家族持ちのアメリカ人教員の家で開き、先生の弾くピアノを聞いたり、学生たちがフランス語や英語、北京語などで詩の朗読を行なった。ある時、心平は日本語で詩の朗読をする。それは山村暮鳥の詩<sup>12)</sup>で、こんなフレーズで始まる。

春だ／春だ／そして朝だ／雨あがりだ／ああい

これを聞いたブリーダーというアメリカ人のドイツ語教師が、「まるでスペイン語にそっくりだ」と言ったので、心平は強いショックを受ける。それはおおげさに言えば、心平にとって「日本語の音感へのひとつの開眼」と言えるくらい、画期的な出来事だったと言う。

それまで心平はヨーロッパの言語や中国語には音感があっても、日本語にはないと思いこんでいた。ドイツ語教師のこの言葉は、「日本語は日本語としての独自の、そして普遍的とも言うべき音感を包蔵しているのだなということをも感じはじめた」と書いている。そしてまた、彼はその頃日本語の講師を頼まれ、日本語の発音の難しさにも直面する。これは、彼が日本でももっとも訛りが強いことで知られる東北地方の福島県の出身であることも大きな原因と思われる。（たとえば彼はイとエの発音の区別ができなかった）ともかく彼は「広州で、日本語の音感に対する一種の自覚と、日本語の発音に対する自分の白痴さ」という自己内部の矛盾を知り、そのことは終生尾を引いた。つまり、「蛙」の詩などはその典型的なものだが、オノマトペの多用など、リズムというか、音感を重視する（おそらく多くは無意識に）彼の作風は、この衝撃的な体験に基づくと言ってよいだろう。

そしてもうひとつ、中国との関わり合い方の問題がある。草野に関する綿密な資料を作成した深澤忠孝は、かつてアナーキズムやリアリストとされた草野が、二十余年後の日中戦争期には、傀儡政権とされる汪兆銘政権に与し、大東亜文学者大会にも出席し、戦争を賛美するような詩を書き続けたことに対して微妙な言い方をしている。

可否は言うまい。「亜細亜の天」は幻想の「牡丹園」の上に「ツツ抜け」に広がり、心平を包んでいるのだ。

心平には、包まれていたい願ひがある。これは王の生誕の儀式にも象徴されるように、神話的意味さえ持っている。

しかし、現実には現実、事実は事実として心平に重たくのしかかる。『亜細亜幻想』という不思議な詩集の必然がここにあり、最後に『絲綢之路』が燦然と輝いたのもその故である<sup>13)</sup>。

これを読むと、心平と中国との関わり合いのポイントは詩集『亜細亜幻想』あたりにありそうだが、その詳細な検討は他の機会に譲る。深澤はこの結論に到るまでに、中国体験、とくに1938年に2ヶ月に及んだ中国旅行あたりを契機として、心平に「天の思想」が成立したと指摘するのだが、草野の資質そのものについては、以下のように言う。

心平はもともと、アナキストやコミュニストになりきれぬ人間ではなかった。一時、アナキストやリアリストとしての傾向を顕著にしたが、生活者としても詩人としても、その根本を規定しているのは情動性である。生育史上からも農本主義的傾向が強いのであり、『第百階級』といった奇抜な発想はするけれども、実は階級的意識などは薄く、むしろムラの共同体意識の方が強いのだ<sup>14)</sup>。

このことは、草野が中国のなかで、あるいは中国に対峙してどのような位置に立っていたか、換言すれば、彼のなかで中国がどの程度骨肉化されていたか、ということと関係があると思う。その点について、筆者は、草野は文学の素材としての中国や中国人の感情はとらえていたが、中国の民衆の側に立っているというより、むしろあくまでも日本文学者・詩人としての視点からは離れていないような印象を持つ。つまり中国の民衆の側に立っていたとまで言い切れるかどうか、疑問に思うのだ。話はすこしズレてしまうかもしれないが、今回の研究で、中国文学を専攻する筆者は、草野と中国文学・中国の文学者との関わりにも関心をもっていたのだが、彼の著作のなかで直接関連があるような例はほんのわずかしかなかった。

自分は文学を専攻したのではないが、Literary club というのに入っていた。従って自分の交友関係も殆どそのクラブ員だった。クラブ員の中には秀才がいた。当時北京と上海と広東で「文学」と云う新聞型の旬報を発刊していた。魯迅などは上海のメンバーだった。広東は自分たちクラブ員が中心になって発行していた。いま見たなら相当青臭いものかもしれないが、当時は相当権威あるもので、丁度「阿Q正伝」が単行本になって出た頃であった<sup>15)</sup>。

このなかで触れられている「文学」というのは、おそらく文学研究会の機関誌として1921年5月に創刊され、29年6月まで続いていた「文学週報」のことと思われる。該誌は1期から171期までは「時事新報副刊」として刊行されたが、そのうち80期までは誌名は「文学旬刊」で、81期（1923、7、30）より半独立して週刊となり、誌名は「文学」となった。文学史では、かつて創造社や鴛鴦胡蝶派、学衡派との論争も同誌上で戦わされた<sup>16)</sup>とあるが、おそらくこれは上海発行のものということだろう。草野が関わったという広東発行の雑誌や活動との関連は現在のところ不明で、今後の課題とせざるを得ない。

いずれにせよ、ここにわずかながら草野と中国近現代文学との接点が見られるのだが、これについてはほとんど同様の内容がもう一度別のところで言及される<sup>17)</sup>だけで、質的量的発展や何らかの展開の様子も見えない。つまり、その後、自ら関与したものとして中国近現代文学が論じられることはなかったのである。

これはひとつには彼がやがて排日運動のために中国を去らなければならなくなったという、物



理的な原因もあるかもしれない。ましてや帰国後の草野は、詩作を続けながらも、生活のために転々とし、中国文学との連携どころではなかったのだ。また、草野は広東に来る以前に、とくに中国に関心を持っていたわけではなかったし、ましてや中国文学に興味をもっていたわけではなかった。嶺南大学で学ぶ間、詩を投稿したり、帰省の折には日本の詩人たちと交流をもったりして、日本文学や日本の文学者とりわけ詩人への関心を強く持ち、それは生涯を詩人として送った彼の原点ともなった。その一方、先ほど見たように、自分が今暮らしている地の文学、すなわち同時代中国文学への関与もまったくなかったわけではないにもかかわらず、その関心はあまり持続・発展しなかった。ここには、もしかしたら嶺南大学の特殊性が関係しているのではないかと思う。ここで、先ほどとはちがう角度から、もう一度、草野の描く嶺南大学の雰囲気を見てみよう。

自分達の学校は居留地の沙面と広東市の対岸に当る河南島の中にある。島とはいうものの、むしろそれは珠江デルタの一つで周囲二十里位の青い島である。なかに七星山という丘がるが、それは北斗の柄杓のように七つの丘が並んでいることから名づけられたものであろう。古代の塔が二つばかりあった。学校は外国資本のミッション系のもので相当大規模である。専属の郵便局、香港・上海銀行の支店、小さいながらも学校で使用する電気の発電所など総て構内にあった。青い芝生に榕樹や椰子やゴムの木などの街路樹、そしてだんだん青の丘や平地には当時も二十四のテニスコートがあった。農場は大農式に耕され、ラグビーユニフォームの縞のようにパインアップルやパパイヤやバナナ畑などが並んでいた。沙面や広東へはランチやモーターボートなどが定期的に走っていた<sup>18)</sup>。

支那の大学としては相当費用のかかる方だったから、ブルジョアの子弟などが多く、羽振りのいい華僑学生や豪商豪農の息子なども随分いた。

ボンクラな学生も多かったが、頭のいい学生はズバ抜けてよかった。これは自分たちの学校だけではなく、支那全土の大学に共通な現象ではないかと思う<sup>19)</sup>。

どこの学校でもそうであるように、勤勉な学生となまけもののグループとがあった。なまけ者は主に華僑の金持の息子たちだった。アメリカ、南洋の華僑が多く、彼等はすっかりアメリカナイズされてフットボールをやったり上等の洋服を何着も持っていた。しかしなかには真面目な学生もいて、それらが何かの時には華僑学生の全体をリードしていた<sup>20)</sup>。

そして教師たちはというと、「五分の二が中国人、五分の三の大部分がアメリカ人、それにイギリスとドイツ国籍の先生が一人ずついた」という具合。教員たちもやはりキャンパス内に住み、独身者は学生寮の大き目の一室に住んでいたのだから、大学生たちは日曜ごとに部屋に押しかけて、

1時間くらい雑談する慣わしだったという。用いたのは英語だった。また、家庭を持っている教師はそれぞれのキャンパスの中に独立の家屋をもっていて、日曜の晩餐に呼ばれたりした。草野はブラウネル、グリッグス、ダンカンという名前をあげているが、「忘れえぬ教師像」としてことさら一人、二人あげて語れぬほど、みな善意溢れる教師たちだったと述べている<sup>(21)</sup>。

こうしてみると、この大学が「中国の大学」と呼ぶには、やや特殊な存在であることがわかる。そもそも他大学では行なわれていなかったにもかかわらず、当初から男女共学を実施していたことはすでに述べた<sup>(22)</sup>。キャンパスの開放的な雰囲気は推して知るべしである。また、草野自身も日中戦争が始まったとき書いた文章のなかで、「その自分達の大学は、そこが治外法権区域であるために今次の事変でもわが軍の爆撃を免れている」<sup>(23)</sup>と書いている。このことは、さらに詳しく当時の状況を考察する必要があるが、少なくともアメリカのミッション系大学であった嶺南はそれ自体が一種の租界状態になっていて、時には広東の町に出て、庶民の暮らしと接することはあったにしても、また自らはけっして贅沢な暮らしをしていたわけではないだろうが、学内が当時の中国の一般社会と同質の空気だったとは思えない。とくに、先に紹介したように、同世代である中国人の学友たちには多くの言及があるが、教師に関してはむしろアメリカ人などの方が多く、彼の憧憬を含んだ知的な関心は、中国以外のところにもかなり向けられていた可能性が大きい。

こうした彼の学生生活は、「その頃のぼくはもし中国と日本が戦争に突入したら、ぼくは中国側に立って日本軍に向かって戦おうなんて思ったほどだ」<sup>(24)</sup>というくらい、排日思想への共感と逆説的な意味での日本人意識を持たせ、日本の詩人という創作者の存在を成立させたが、同じく創作者として中国の創作者たちとの連帯を促すまでには到らなかったようだ。歴史の法則を無視して言うなら、もし草野がもう少し深く長く、何らかの形で当時の中国の文学者らと接触をもつとか、関心が持続・発展していたなら、つまり中国人の感性で中国の事物・人民を描く方法に触れていたなら、その後の南京政府との関わり方などもまた異なっていた可能性も捨てきれない。先ほど述べたとおり、このことについては、当時の嶺南大学の状況、とくに中国語や中国文化・文化に関する授業や教員の配置がどのようになっていたのか、身近に当時の中国の文学運動と関わりを持つ人がいなかったのかどうかなど、さらに詳しく調査する必要がある。結局、彼はある意味では中国のなかにありながら、中国ではない世界で暮らしていたとも言える。そしまた、個人的な意味での、若さ故の目配りや思慮・配慮不足があったかもしれないし、さらには先の深澤忠孝の指摘のように、「情動」的な彼の資質も大きく働いていたかもしれない。こうしたさまざまな要因のからみあいだが、その後の彼の生き方を決めたのであった。

## V、おわりに

85年に及ぶ長い生涯において、詩人草野心平は1921-25の広東と、1940-46の南京の、二度に

わたる長期の中国生活を体験した。もちろんそのことは彼の作品に十二分に反映されている。今回は、そのうち最初の嶺南大学での体験を中心に、嶺南大学との関わりについて考察し、そこで体験が詩人としての出発点として大きな意味をもっていたことを確認した。2回目の滞在に到る要因も、嶺南での体験が大きく関わっていたことが明らかになったわけだが、そのことについてはまた稿を改めて考えてみたい。

嶺南大学で体験した文学や言語に関わる事柄は、彼の詩風に大きな影響を与え、そこで培われた友情はその後の彼の人生をも決定した。筆者としては、同時代の中国文学との接点を見いだせたらと願ったのであるが、現時点ではあまり多くのことは見いだせていない。これはもしかしたら、アメリカ系のミッションスクールである嶺南大学の、中国でのあり方や「情動的」あるいは「ムラの共同体意識」をもつと評された本人の気質の問題などが関係しているのかも知れないことは本論で述べたとおりである。今後、嶺南大学との交流のなかで、課題として残された事柄などを、共同で研究できるような機会があれば幸いである。

## 注

- (1) 大藤治郎「編輯のあと」『詩聖』1923、2 玄文社
- (2) 草野心平を追悼する『現代詩読本 るるる葬送 草野心平』思潮社、1989の帯のキャッチフレーズより。
- (3) 小野和子『中国女性史——太平天国から現代まで』平凡社、1978、p148
- (4) 本人にも「嘯む 少年思慕調」という詩（詩集『乾坤』1979所収）などがある。
- (5) 「わが青春の記」『草野心平全集』第9巻所収
- (6) 黄瀛：1906～ 詩人。母は日本人。重慶で生れ、幼児期は日本で育つ。中国で教育を受けたあと、日本の陸軍士官学校で学ぶ。日中戦争期には国民政府の少将。新中国では四川外語学院で教鞭をとる。草野心平とは1923年、『詩聖』にふたりの投稿詩が掲載されて以来、交流があった。詩集に『景星』1930、「瑞枝」1934など。
- (7) 林柏生：1901—46  
中国の政治家。字は石泉。広東省の人。フランスに留学。1932以後、汪兆銘派として、機関紙「中華日報」などの主筆。日中戦争で汪兆銘の和平運動に参加し、傀儡政権の行政院宣伝部長などとなる。第二次大戦後、南京で銃殺された。
- (8) 『草野心平全集』第3巻付録「月報」、譚覚真『潜行三十年』文言社、1977などに再録。
- (9) 寥夢醒、林白生以外に彼が詩やエッセイなどで触れている主な学友は、以下のようになる。（ ）内は名前をあげた時に触れている情報である。

羅孝明（先輩、横浜中華街でレストラン経営）

陳栄捷（先輩、米ダートマス大学で東洋文化の講座を担当）

湯澄波（妻も嶺南学友）

司徒喬（画家、屋根裏部屋仲間）

饒世芬（アルバイト仲間）

葉啓芳（中山大学文学院院长）

劉思慕（元、遂元。国際関係研究所所長）

梁宗岱（文学グループ仲間。在学中、中退してスイス、パリへ。陶淵明の詩を仏訳）

許錫慶（エッセイ「草野心平香港に寄る」の筆者。嶺南大学ではなく広東中山大学）

蘆観偉（キリスト教関係者）

陳相生（音楽愛好者）

陳玉麗（ジャワ生れの華僑、女性）

利芳珍（女性）

甘生馨（英語クラス、女性）

- (10) 長光太「形と史と」全集2巻月報
- (11) 吉田熙生 草野心平詩集『凹凸』解説
- (12) 山村暮鳥「春」、詩集『土の精神』素人社、1929所収。原作は60数行から成る長詩で、ここにとられたのは第1段落。全編、ひらがなで書かれている。春の朝の雨あがりの土の上や光のなかで生命を謳歌している虫たちに思いを寄せ、苦しみ悲しんでいる人間も、いつかはまことの光を見いだすだろうと歌う。途中で「ふわふわ ふわふわ」という浮游感を表わす擬声音が何度も繰り返され、現実と希望（夢）を同じ空間に漂わせている。
- (13) 深澤忠孝「草野心平の詩と遍歴」『現代詩読本 るるる葬送 草野心平』（思潮社、1989）p211-217
- (14) 同上
- (15) 「嶺南大学の思い出」『支那点々』三和書房、1939、全集8巻、p68-69
- (16) 「文学」丸山昇他編『中国現代文学事典』東京堂出版、1985 p235
- (17) 「梁宗岱のこと」『支那点々』三和書房、1939、全集8巻p103
- (18) 「嶺南大学の思い出」『支那点々』三和書房、1939、全集8巻p67
- (19) 同上、p68
- (20) 「支那の青年層」『支那点々』三和書房、1939、全集8巻p87
- (21) 「青春を駆け抜ける 嶺南大学の教師たち」『止まらない時間のなかを』PHP研究所、1979、全集12巻p65
- (22) 注3参照。
- (23) 「支那女学生の思い出」『国民評論』1939、1初出。のちに『支那点々』1939所収。全集8巻p91
- (24) 「青春を駆け抜ける 中国、わが青春」『止まらない時間のなかを』PHP研究所、1979、全集12巻p70

#### 主な参考文献

- 1、『草野心平全集』全12巻 筑摩書房、1988~94
- 2、『現代詩読本 るるる葬送 草野心平』（思潮社、1989）
- 3、草野心平詩集『亜細亜幻想』創元出版、1953
- 4、『草野心平 凹凸の道——対話による自伝16』日本図書センター、1994
- 5、粟津則雄編『草野心平詩集』芸林書房、2002
- 6、いわき市立草野心平記念文学館編集『草野心平 常設展示図録』いわき市立草野心平記念文学館、1998
- 7、川内村教育委員会編集『草野心平とかわうち』川内村、1989
- 8、橋本千代吉『火の車板前帖』筑摩書房、1998
- 9、北条常久「宮沢賢治、草野心平、黄瀛を結んだ赤津周雄」『秋田文学』13号、秋田文学社、2002、10所収
- 10、譚覚真『潜行三十年』文言社、1977

※この他、香港の嶺南大学の関係者より提供された、当大学の刊行物の記事を参考にした。